

## 「北の王」の正体と企てに関する考察 2 - NWO グローバリズム

「北の王」の正体と・・・1」で「北の王」について聖書の表現の意味するところを解説しましたが、ここでは、その理解に沿って今後これからの世界の動きが、具体的にどのような展開になってゆくのかを私なりに予測してみました。

これは、預言の成就に照らしてという観点からはちょっと外れますが、まず、預言に関わる国家群について最初に触れておきたいと思います。

なぜなら、多くの聖書預言に関する HP やブログ等で、その実体は、アメリカだとか、やれ日本だ中国だというような解説が多いので、ここに書き留めておきたいと思いますが、基本的に、アメリカ、日本、中国などは聖書預言との直接的な関わりは何もありません。

というのは、預言は飽くまでも、イスラエルを中心とし、東西南北などの方角に関しても同様ですが、例えば「東」という表現は、その方向のあらゆるものが対象になり得ますが、何処までも預言は、イスラエル周辺諸国に限定されています。

預言で扱われるエリアをジャンル分けするとすれば、それは、「イスラエル」と「周辺諸国」そして「全地」の3つと別枠として「大バビロン」ということになるでしょう。

国家にしても個人にしても個別に識別されるのは「周辺諸国」のみです。

つまり、ヨーロッパ、中東、アフリカ北部の一部です。

なぜなら、時代の進展と共に「新大陸」が発見されようが、どんな文明が発達しようが、世の基本的な勢力は、預言が書き終えられた時から何も変わっていないからです。

その後誕生した大国であれ小国であれ、それらはすべて、基本的な勢力（分かりやすく言えば、エジプト、アッシリア、バビロン、メデア・ペルシャ、ギリシャ、ローマという帝国を築いた勢力）の延長線上にあるだけだからです。

言わば、この7つが、龍の頭にある7つの角で表される母体であり、本陣本店であり、その他はそこから派生した支店、出張所に他ならないか、あるいは、預言とは全く無関係ということなのです。

もちろん、預言されている出来事が起きたり、近づいて来る場合、世界の様々なところでその影響は出て来るでしょう。

実際世界の主立った国、とりわけ、覇権国のような国は、別枠としての大バビロンには間接的な関わりがあります。

というのは、「大バビロン」はいわゆる「闇の支配者」と密接な関係があるからです。

詳しくは「107 聖書における最大の極悪人「大バビロン」をお読みいただくと分かりますが、ここにその一部を抜粋しておきます。

----- 抜粋 -----

それは黙示録 18 章の 23 節です。

「なぜなら、おまえの商人たちは地上の力ある者どもで、すべての国々の民がおまえの魔術にだまされていたからだ。」(黙示録 18:23)

「地上の高官となっていた」(岩波翻訳委員会訳)

「地上の権力者となった」(新共同訳)

「地の有力者であった」(前田訳)

「地上の力ある者どもで」(新改訳)

「地の権力者となり」(塚本訳)

「地上で勢力を張る者となり」(口語訳)

「地の大臣となり」(文語訳)

この、高官、権力者などと様々な訳語が当てられている語はギリシャ語の [メギスタネス  $\mu\epsilon\gamma\iota\sigma\tau\acute{\alpha}\nu\epsilon\varsigma$ ] という語です。

ここでは、大バビロンが裁かれる理由、いわゆる有罪判決の根拠としての「事実認定」が行われているところですが、興味深いことに、ここに三様の立場（職業？）が登場します。「お前」と「商人」と「権力者」。

元々は「お前」つまり「大バビロン」

では、「お前の商人」とは何でしょうか。

そしてその商人は、単なる商人ではなく「地の権力者」ともなった

それ故に「大バビロン」が滅びに値する理由の一つとされています。

----- 中略 -----

今や、マスコミを手なづけ、新たな法律を作ったり、紛争や戦争を勃発させるなど、政治家やテロリストたちを動かしているのは、その裏にいる大企業、財閥であり、あるいは、国際金融資本家などでしょう。

そしてそれらのムジナと同じ穴に住んでいる、いわゆる歴史的に古来から現代にまで続く「領主、廷臣、総督、貴族、王族」たち、裏の顔を持つ、慈善的な宗教家に見える輩たちこそが、総合的大バビロンの正体であり、同時に、それこそが、裁きの根拠となる、と断言しているのが、この黙示録 18:23 なのであろうと考えます。

別の表現で言えば「グローバリスト」ということになります。

-----

それで、聖書預言の成就が近づくと、これらの「闇の支配者」には末期的な症状が見えてくるはずです。

まずアメリカは「スケープゴート」として葬られることになるでしょう。

もちろんこの大国が、国民もろとも消え失せるというようなことではありませんが、「株式会社アメリカ合衆国」という名で呼ばれることもあります。初めから実験国家（あるいは実情は、超巨大コンツェルン）として創られ、運営されてきたアメリカは、倒産を余儀なくされ、覇権国としては、いずれ終焉を迎えるでしょう。

同様にワン・ワールドを目指すための橋頭堡として創られた EU も、その一つの役割として、その短い歴史において、政策運営の成功、失敗例のデータを提供しつつ、その終焉も差し迫ったようです。

イギリスに次いで恐らく今年（2018）中には、フランス、スペインなど幾つかの国が EU を脱退することになるのではないかと思います。

そしてここまで積み重なった世界中の負債などはもはやどうしようもない状態ですので、早晚、リセットする定めにあるのは避けられないと言われています。

つまり規模の程度はともかくとして、世界経済、金融制度は近いうちに破綻 / 崩壊するでしょう

そもそも、「ワン・ワールド主義」「グローバリズム」（汎地球主義ともいわれる。国家の枠をこえて「一つの世界」という視点に立とうという考え方）は古くニムロデの時代からみられるものです。

「彼らは、「さあ、天まで届く塔のある町を建て、有名になろう。そして、全地に散らされることのないようにしよう」と言った。」（創世記 11:4）

神はこの企てのゆゆしさを先見され、複数の新たな言語体系を創ることまでして、それを阻止されます。

「彼らは一つの民で、皆一つの言葉を話しているから、このようなことをし始めたのだ。

これでは、彼らは何を企てても、妨げることはできない。

我々は降って行って、直ちに彼らの言葉を混乱させ、互いの言葉が聞き分けられぬようにしてしまおう。」（創世記 11:6,7）

そして今日、言葉の障壁を乗り越えて、ようやくその野望を実現させる目前まで来ています。

もちろん、かのニムロデをして、その企てを始めさせたのは他ならぬサタンです。それは、サタン自身の野望に他ならないからです。

(※ 最近では、「サタン」の名の代替として「ルシファー」と表記するのが人気ようです。しかし、これはある神学に基づくもので、「ルシファー」という語は聖書に存在しませんので、私は使用しません。ちなみに出处と主張されている聖句はイザヤ 14:12 ですが、そこで用いられている語は「へ語：[ヘーラル]で[朝／夜明け]という意味の語です。そこに[Lucifer]という語を充てているのは誤訳の類と言わねばなりません。)

今日「グローバリズム」はどのように具体的に見られるでしょうか？

実のところ、共産主義体制としてのソ連邦 (Soviet Union)、アメリカ合衆国 (United States of America)、ヨーロッパ連合 (The European Union) 国際連合 (United Nations) などは皆 (unite, union 合体させる、団結させる、結束させる) 同じです。同じ思想から生まれたものです。

EUのユーロ通貨を始め、近年、TPPやNAFTAなど、貿易や経済や金融の自由化とか、難民流入、移民の受け入れなど、国境がゆるくなる傾向が見られていますが、これらはすべて一つの主義に基づく方針です。つまり「グローバリズム」です

一見、望ましいもののように思われるかもしれませんが。

しかし、バベルの塔事件に対する神の配慮が物語るように、人間のグローバリズムは詰まるところ、「失敗が明らかになった」と言われる共産主義の更に上をゆく、完全な全体主義 (ファシズム) の頂点に達しようとする企てです。

それはごく少数の権力者と人間奴隷牧場からなる人類社会へと変革するもので、グローバリズムによる平和、安定、幸福という主義主張、解説はすべて幻想にすぎないということを理解すべきなのです。

祝福どころか、被る害悪のほうが遥かに大きいということです。

「これでは、彼らが何を企てても、妨げることはできない。」(創世記 11:6)

と言われて以来久しいですが (およそ6000年)、それを妨げていた、言語の違いによる一種の隔離政策は、現代のインターネットの普及、マスメディアの発達、コンピュータによる機械翻訳などによってほとんど無効化され、もはや、「これでは、彼らが何を企てても、妨げることはできない。」と言える時代になりました。

しかし、断っておきますが、決してNWOという概念そのものが誤っているというわけではありません。

これまでの歴史のように、相争う分裂した、民族、国家郡ではなく、全世界、すべての人種人々が対等に立ち、その尊厳と安全を守られ、一致して平和に住むというのは、本来あるべき姿なのは明らかです。サタンとその崇拝者が推し進めている現在のNWOという企みは、王キリストによって成し遂げることになっている神の王国のパクリであり、全くの偽物です。

実のところ、サタンの発想にオリジナリティは皆無で、全ては聖書中に示された神の計画のあらゆるものを逐一取り上げて作り出した贋作の百貨店のようなものです。

偽キリスト、偽ハルマゲドン、偽神の王国、偽キリスト教などなどです。

ところでいわゆる「サタニスト」という人間がいます。

そして、知っている人は知っていますが、知らない人は疑ってもいなことですが、国家元首や宗教諸派の上位にいる人間を操っている黒幕のグループが存在すると言われていま

す。「イルミナティ」などとも呼ばれておりますが、彼らこそが「NWO ニュー・ワールド・オーダー（新世界秩序）」「グローバリズム」の推進者です。

「サタニスト」といっても、様々なタイプがあるようで、単なる趣味や嗜好あるいは、歪んだ信仰心と言うものだけでなく、全身全霊をかけてマジで崇拝している人もいます。すべてのサタニストに共通している特徴は、「強欲」に尽きるでしょう。

彼らの間では、恐ろしく邪悪で、おぞましく退廃的な、オカルト的なイニシエーションと

いうか、定期的な儀式などが行われるようですが、あえてそこまでするのは、「見返り」「ご利益」が実際にあるからです。

例えば、単なる比喻ではなく文字通り「悪魔に魂を売り渡した」ことをカミングアウトしたレディ・ガガという人がいます。

現にそれを欲するあまり、そして、実際にそれが与えられる経験を通して、いよいよサタニズムの深みに嵌まってゆくでしょう。

ところが、その御利益というか、導き、助けが、ある時から休息に途絶え始め、サタニストは、どうしたことかと慌てふためく時が来るはず

です。天での戦争が勃発すると、攻防戦の極みに至る間、サタニストはサタン悪霊たちから、放ったらかしにされるということです。

「さて、天に戦いが起こって、ミカエルと彼の使いたちは、竜と戦った。それで、竜とその使いたちは応戦したが、勝つことができず、天にはもはや彼らのいる場所がなくなった。こうして、この巨大な竜、すなわち、悪魔とか、サタンとか呼ばれて、全世界を惑わす、あの古い蛇は投げ落とされた。彼は地上に投げ落とされ、彼の使いどもも彼とともに投げ落とされた。」(黙示 12:7-9)

#### 【ミカエルと彼の使いたち】

この天での戦争がどれほどの規模かといいますと、龍と戦うみ使いたちの人数を考えると、その数は、「幾万」(ダニエル:10)「無数」(ヘブル 12:22)と表現されているように、相当の人数のようです。

#### 【竜とその使いたちは応戦したが、勝つことができず】

一人の人間に憑いていた悪霊だけでも「レギオン」(軍団)とされています。(マタイ 8:28 - 34)

西暦 1 世紀のローマの軍団<レギオン>が普通は 6,000 人で構成されていたことを考えるとこのレギオンという語が相当な数をイメージさせるものだということもわかります。悪霊全体ではどれほどの人数なのか想像できません。

サタン側が次第に劣勢になるに連れ、他の悪霊(墮天使)たちも加勢に入るということですが、最終的には、み使い勢 対 悪霊勢との全勢力を傾けた戦いになることが、聖句の表現から伺い知ることができます。目に見えない天での出来事であるとは言え、それは地上にも何らかの形で認識できる変化として現れると思います。

例えばダニエル 8 章に「ペルシャの君、ギリシャの君」という記述があります。

ガブリエルと思しきみ使いが、ダニエルに預言のメッセージを届けるのをペルシャの君(ペルシャ帝国の王の背後霊と言える悪霊)に妨害されて、ダニエルのもとに着くのに 21 日も遅くなったことを告げています。(ダニエル 10:13)

一人の悪霊がガブリエルに抵抗し、ミカエルが来てくれなければ、更に手こずったと考えられます。

この、ダニエルへの啓示が留められていた 21 日間は、考えてみれば、ペルシャの王などの支配者にとっても、いつものバックアツプは得られなかったはずです。

聖書の表現から見る限り、当初はミカエルとその使いたち 対 「龍」、すなわちサタンが単独で戦っていたということでしょう。苦戦していたので後に他の悪霊たちも参戦したということだと思えます。

また、この戦争に神ご自身は手を出されないようですから、最終的な決着が着くまで、それほど短時間で済む話ではないということです。力や人数の違いにもよるでしょうけど、数年ということもありえなくはないかもしれません。

ということは、その間、サタンも悪霊たちも、攻防戦に手一杯で人間たちに関わっている場合じゃないという状況が生まれるはずですよ。

イルミナティらは、自分たちの野望を実現すべく、非常に長い年月をかけて計画し準備し着々と押し進めてきました。

しかし、はっきりといつ頃とは言いきりませんが、このところ、偽旗テロ事件やそのやり方を見ると、稚拙さが目立つようになってきているような気がします。

いろいろなことが、かつて程、思いどおりにできなくなっているのではないかと推察されます。

何を言おうとしているかといいますと、これらのことから、わたしは、ミカエルはすでに立ち上がり「天での戦争」はもう始まっているのではないかと見ています。

このまま行くとグローバリズムが志半ばで挫折しかねない状況も見受けられます。

今後、イギリスが正式に EU を抜け、他の国も続き、ついに EU 自体が解体し、国連（場所の移転も検討されているようです）までもが、有名無実的になってゆくなら、確実に、サタン悪霊が、一時的に人間に関われなくなっている証拠と見ていいと思います。

依然として人間の悪徳、犯罪などは後をたたないと思いますが、いわゆる一般の犯罪と、グローバリストによる悪巧みは、その質も規模も大きく異なります。

世界戦争、大々的なテロ、気象操作、地震 / 津波、金融操作などは最近は頓に頻繁ですが、これまでの惰性というか、彼らの日毎の生業としてしばらくは今後も続くと思いますが、しかしもし、「すでに天での戦争が始まっている」という私のよみが当たっているなら、恐らく、エスカレートするというよりむしろ、下火になってゆくのではないかと思います。

ただ、先にも触れましたが、世界経済の混乱、金融制度の崩壊は避けられないでしょう。そうした、世界恐慌的なパニックから落ち着きを取り戻すに従い、近年の歴史とは逆に今後、人間の知恵、善意、理性が、昔のように息を吹き返し、生活も今のような愁訴感というかガンジガラメ感は緩和され、多少なりとも世界的に平穏な状況がみられるようになるかもしれません。

(「ガンジガラメ」をカタカナで書くと、なんか「ゴジラ」みたいな怪獣と言うかモンスターの名前みたいですね)

もちろんそれは「東の間」でしょう。

天での戦争で決着がつき、サタンと悪霊たちが地に落とされたとたん、急速に事態は悪化し、言わば地獄化することになります。

「地と海とには、わざわいが来る。悪魔が自分の時の短いことを知り、激しく怒って、そこに下ったからである。」(黙示 12:12)

反キリストが不意に登場する時が「平穏な時期」であると書かれているのは、こういう流れではないかと見ています。

「神の国（キリストの支配）」によってハルマゲドン後、世界はいきなりワンワールドになるわけではありません。

千年王国期になっても依然、世界は諸国家に分かれ、「諸国の民」「地の王たち」は存在します。

イスラエルで施行される政治は理想的な政体のモデルとして、エルサレムはモデル地区として諸国民に示されることになります。

「諸国の民が、都の光によって歩み、地の王たちはその栄光を携えて都に来る。」(21:24)

そして何と、千年もの長い年月をかけて、周到な準備段階を経て、それによってキリストの治める王国こそが、人間にとって最善の支配であるということが実証された後、サタンが再び開放されます。

これが最後の試みとなります。

この時全地の「マゴグとゴグ」の勢力がサタンの側に立ち、モデル地区エルサレムを攻囲しますが、天からの火で滅ぼされます。

この時サタンの側につく者たちは、サタンと同じ野望が捨てられないのでしょう。

つまり、「人々の幸福 / 平和」よりも「自分が支配者になる」という呪縛から逃れられないのでしょう。

そしてサタンは永久に滅ぼされます。

「しかし千年の終わりに、サタンはその牢から解き放され、地の四方にある諸国の民、すなわち、ゴグとマゴグを惑わすために出て行き、戦いのために彼らを召集する。彼らの数は海べの砂のようである。

彼らは、地上の広い平地に上って来て、聖徒たちの陣営と愛された都とを取り囲んだ。すると、天から火が降って来て、彼らを焼き尽くした。

そして、彼らを惑わした悪魔は火と硫黄との池に投げ込まれた。」(20:7-10)

こうしてようやくキリストの王国はなすべきすべての役割を終えて、その王権を神にお返しになります。

「それから終わりが来ます。そのとき、キリストはあらゆる支配と、あらゆる権威、権力を滅ぼし、国を父なる神にお渡しになります。

キリストの支配は、すべての敵をその足の下に置くまで、と定められているからです。」  
万物が御子に従うとき、御子自身も、ご自分に万物を従わせた方に従われます。これは、神が、すべてにおいてすべてとなられるためです。」(15:24,25,28)

この時点で全世界は文字通りのワン・ワールドになります。

創造者なる神による本物のNWO(新世界秩序)の誕生です。